

# 令和3年度 短歌講座 歌集

講師 藤森 円 先生  
(塩尻短歌館指導員)

塩尻市中央公民館

令和三年度短歌講座を振り返って

毎年六月から翌年二月にかけて九回行っている中央公民館短歌講座です。このたび三冊目の短歌集を発行していただくこととなりました。

この講座は、私の恩師である故・保科郁夫先生がかつてこの講座の講師をされ、続いて前公民館長・北澤智彦先生が講師をされ、令和元年度より私が受け持つこととなりました。若輩者の私を、講座の諸先輩方が温かく迎え入れてくださり、盛んに意見交換をしながら講座を行っています。若輩者とはいえ私も遠慮なく添削を行っています。一堂に会して、感じた思い・言葉を交わしていくからこそ、様々な見方を学ぶ機会となります。

▼今回より、作者名を公表していただきました。作者自身の心により動かされた指先が、かけがえない歌を生み出しています。ここに印刷物として形となることに喜びを持つとともに、一人でも多くの方の目に触れていただくことで、新たな心の動きが伝播していくことを祈ります。▼

講座の皆さんから生まれた短歌による歌集。是非一度手に取って、どこからでもパツと開いたところから読んでみてください。興味が持てたらその前後に目を通してみてください。さらに興味が沸いたら、最初から一通り読んでみてください。短歌づくりはいつでもどこでもできるのと同様に、短歌の読み方も色々あって楽しめば良いのです。

そしてさらに興味が沸いてきたら、ぜひ私たちと一緒に短歌を作りましょう！

静寂な

空気振わす

カツコウの

声に目覚めて

今日が始まる

岩下保津美

セルフレジ・

キヤツシユレスで

颯爽と

我は隣の

レジ打ちの列

三溝みい子

刈られずに

一冬過ぎし

田に五月

代掻始まり

早苗植はるる

赤羽すえみ

寝返りを

打てば肩先

鈍痛が

コロナワクチン

効きしと安堵

藤松淑子

田植え餅

作つたからと

届けられ

懐かしきかな

言葉だけでも

田辺幸子

智恵深き

神に仕える

ふくろうよ

コロナウイルス

連れてってくれ

永原隆



谷川の

音を聴きつつ

引きし落

祖母の伽羅落

想ひつ煮込む

古畑かめ代

嫁さんの

臓器提供

受けし息子は

次の人生

如何に行きなむ

矢崎修子

どくだみ

藪草の

花白々と

咲く小道

こだはり捨てん

歩を早めゆく

折橋美代子

「落ち着いたら

一緒にごはん

食べようね」

見えぬ明日の

約束を又

折橋玲子

霰降る

こまゆみだけ

小檀嶺岳の

岩陰に

小岩鏡が

ひっそりと咲く

守屋喜久男

コロナ禍で

三密のない

菜園へ

せきれい　　すずめ

鶺鴒・雀・

椋鳥も来る

百瀬良夫

河原から

ぎらぎらぎらと

春蝉が

音響のごと

水無月に鳴く

小島ふみ代

さなえだ

早苗田の

深みずたゆとう

ちぎ

断れ雲

下校の子らの

声やはらかし

下井貞子



ワクチンの

予約済ませて

帰るさに

初郭公の

ひと声高し

松澤美和

蝶が舞い

子猫じゃれあう

縁側で

妻と語らう

子育ての頃

島津文雄

書架ならば

十余枚もの

辞書事典

片手に載りて

おすきにどうぞと

土田安子

フリックして

変換をして

保存して

魂宿る

歌を作らむ

藤森

円

五月の庭

緑深きの

その中に

石楠花三種

競いて胸張る

岩下保津美

夏休み

遠出の計画

立てられず

何をしようか

子どもわくわく

安藤

寿秀

参道に

うずくまりをる

雛が二羽

この辺へび猫

よく見かけたり

三溝みい子

梅雨空に

まきい

真黄の

びようやなぎ

未央柳

ちやせん

茶筥のごとき

雄しべ立てをり

古畑かめ代



人里に

下りし熊は

「駆除」となる

社会と共に

暮らせぬものか

赤羽すえみ

信州の

高原ならば

密ならずと

ずらり並ぶは

都会のナンバー

折橋玲子

へだたりし

歴史認識

合わせたい

離れた星も

七夕に会う

永原隆

畑に居て

急に冷たき

風流れ

雨の近づき

知らせるように

田辺幸子

リモートに

学ぶ孫娘

のたまひぬ

しばらく父親

里帰りせよ

矢崎修子

先ゆきの

不安を背負ひ

風うけて

コロナ封じの

接種に向かひぬ

下井貞子

夕チアオイ

空に向ひて

花をつけ

コロナ禍横目で

夏を呼びをり

百瀬良夫

「岩村」とふ

古き町並み

放映に

友とめぐりし

た

春の日の頭つ

折橋美代子



ざつと降り

雲間におひさま

見え隠れ

梅雨の洗濯

気が揉める家事

小島ふみ代

高ボツチ

レンゲツツジの

咲く丘に

牛が昼寝し

キジの鳴き声

守屋喜久男

わが家より

程良き所に

ある公園

熊が出没

サクランボ食べに

藤松淑子

風鈴の

音色爽やか

縁側に

父の背中を

団扇奏でる

島津文雄

スーパーの

物産展に

せめてもと

あれこれ買ひて

旅情なぐさむ

松澤美和

枝先に

美しく囀る

鳥を追ふ

シヤッターチャンスは

なかなか来ない

土田安子

今日もまた

些細な嘘を

つきました

黙つてゐれば

誰も傷つけぬ

藤森

円

世の中は

進めば良き事

多かりと

思えば貧しき

犯罪ばかり

岩下保津美



好きじゃない

スイカ食べたら

おいしくて

この美味しさは

里山マジック

安藤寿秀

青空に

雲の浮かびて

青田には

白鷺一羽

じつと動かず

三溝みい子

虻仕留め

紙に包みて

捨てたるも

蘇生を恐れ

後ふり返る

藤松淑子

トコトコト

ははせな

母馬の背中追

とうねっ子

乳吸う姿に

ひと

人間の子思う

折橋美代子

山からの

冷たい水に

根付いて居る

勿忘草が

群れ立ち咲けり

小島ふみ代

反り合わぬ

期待と不安

ないまぜて

混迷深き

東京五輪

永原隆

待ち侘し

ワクチン接種に

空きありの

チャンスを掴む

腕まくりして

折橋玲子

じりじりと

暑さ続きに

梅を干す

夫と分け合おう

大粒一つ

古畑かめ代



夕方の

花壇に水を

撒き終えて

明日又ねと

小さき蛙に

田辺幸子

前常念の

岩とハイマツ

果てしなく

雷鳥二羽と

白山石楠花

守屋喜久男

蓮池に

満開に咲く

赤き花

井戸尻遺跡

静寂の中

矢崎修子

オクラ好きの

吾に声かけし

八十五歳

腰こごめども

見事な出来栄え

赤羽すえみ

前回の

東京五輪

忙がはし

コロナ禍もなく

無難に閉会

百瀬良夫

オリンピックの

目立つことなき

裏方や

汗ふく人らの

大きいメダル

下井貞子

食卓に

夫婦茶碗

おしやれして

寄り添うように

仲睦まじく

島津文雄

眠られず

切子に注ぐ

冷し酒

遠くかすかに

潮騒を聴く

松澤美和



路沿ひの

ずっと見慣れた

花畑

去年と今年は

草のみ深し

土田安子

わたくしと

あなたの心を

繋ぐため

不要不急の

短歌を作る

藤森

円

さまざま

化石が語る

戸隠の

太古は海の

底にありしと

岩下保津美

夏休み

えんてらすに集う

子どもたち

その笑顔のため

主事頑張ります

安藤寿秀

線香の

とほ  
点らぬうちにと

気の急きて

縁りある墓

拝む盃蘭盆

藤松淑子

庭の面もの

数多の花の

咲き盛り

染しみ入るは青あを

つゆ草の花

下井貞子

畑隅の

夕顔の蔓

伸びに伸び

胡瓜の棚まで

侵蝕したり

三溝みい子

ワイン用の

ナイヤを摘んで

腰伸ばせば

ぶどうの棚に

椋鳥休む

守屋喜久男



庭の蔓

そう身込めて

引き寄せば

はや

早南天の

白房みゆる

矢崎修子

長雨の

予報に友の

耕運機

スベリヒユなど

鋤き込み進む

田辺幸子

琉球大へ

入りし孫より

趣味募集と

夫喜々として

「沖縄空手」

赤羽すえみ

雨続き

遅れた蝉と

早き虫

共演の日は

一日限り

古畑かめ代

凄ましい

土石災害

目の前に

地域仲間で

協力為合ひ

小島ふみ代

「おもてなし」の

日本の心

っ  
伝つられず

コロナ禍の中

五輪閉会

百瀬良夫

「言霊」の

迫力の文字

蟻高の

パフォーマンス書道

墨にまみれて

松澤美和

花の種

あがな

購ひて蒔けば

見本とは

違ふ花咲く

二度もありたる

土田安子



あいむすめ

愛娘

産声高く

母となり

あやす姿に

じじ

爺は見つめる

島津文雄

団栗から

成長させた

櫟の木に

甲虫来ず

蜂おはします

藤森

円

飛行機は

しばらく空気を

振るわせて

轟音降らし

空に飛び立つ

岩下保津美

手帳には

9月のページ

×だらけ

これから先は

ありませんように

安藤寿秀

墓前の

道を歩けば

線香の香

彼岸の入りの

空高く高く

三溝みい子

温暖化の

火種をまいて

その火ゆえ

わが身焼かれる

ホモサピエンス

永原隆

七味温泉の

紅葉館の

庭先の

狸二匹と

目が合ひそらす

守屋喜久男

(開田) 高原の

蕎麦の畑は

花盛り

雪野のごとく

著くせまり来

折橋美代子



ネキリムシ

姿見えねど

二本もの

ブロッコリーの

苗を千切りぬ

田辺幸子

雨しとど

墓参に行かむ

心萎え

お萩を作る

秋彼岸明け

藤松淑子

ときとして

気分くしやくしや

潰すとき

散歩の道に

踏まれしマスク

下井貞子

萩の花

藤袴咲く

秋の庭

眼凝らして

アサギマダラ待つ

赤羽すえみ

掃き寄せた

落ち葉の中の

金木犀

その香気づかぬ

マスク生活

折橋玲子

パラ五輪

ラケット啞へ

足で弓

非力に挑むを

驚き見入る

百瀬良夫

「もういいよ」

子らの声ちる

右左

「あれ？どこいつた！

わからんなあ」と父

矢崎修子

お勝手で

五泊六日の

コロコロリー

堪能したよ

エンマコウロギ

小島ふみ代



輝く目

光追いかけて

新生児

宝石のように

揺らいでいる

島津文雄

孫帰宅

その頃までに

考へる

高校野球

今日のヒーロー

松澤美和

パラ五輪

涙うかべし

友ありて

不可能はなし

ポツンと零す

宮腰征彦

吾と共に

山を下りて

みのごづち

庭に落とされ

目的果たす

土田安子

無駄になつた

時間を返せと

呟けば

つぶやくことも

むだに過ぎゆく

藤森

円

父 兄の

丹精の皐月

引き継いで

夫と八鉢

苦心の移植

小島ふみ代

さまざまな

大ぶろしきの

公約が

百花繚乱

空手形咲く

永原隆

公園に

ベンチ見つけて

見上げれば

青空に映ゆ

初紅葉かな

古畑かめ代



突風の

くるま

ごとく自動車が

過ぎ行きて

もみじ

紅葉の落葉

舞い上りゆく

折橋美代子

鋤杖に

もたれかかりて

眺むるは

気まぐれ氣象の

跡ぼうぜんとして

百瀬良夫

新品の

眼鏡の縁の

黒光り

きりつと締まる

顔も心も

安藤寿秀

転戦し

戦さ敗れて

復員す

言葉少なに

わかれ

別離を告げる

宮腰征彦

前よりも

少し明るく

髪染めて

体操教室

マスクしてゆく

矢崎修子

ハスの花

胸に抱きて

海わたり

今ここにいる

若きらを愛す

薄田勝美

不思議だね

急に親しく

気も許す

趣味が同じと

分かるやいなや

土田安子

秋の日に

束ねし藁わらを

軽トラが

うず高く積み

農道を行く

三溝みい子



無花果を

七つ貫いて

ワイン煮に

秋の厨に

甘き香の立つ

田辺幸子

家形の

手作り巣箱

ここ二年

小鳥来たらず

秋行かむとす

藤松淑子

秋空の

雲の形を

想像す

象のゆつくり

牛のゆつたり

下井貞子

秋空に

夫押ししてくれし

車椅子に

思ひの一票

無事に済ませり

赤羽すえみ

自慢気な

夫の両手に

秋なすび

煮るなり焼くなり

ご随意と光る

折橋玲子

板葺の

スズメ蜂の巣

朽ち落ちて

空家の軒に

秋雨のうつ

守屋喜久男

小春日の

こすもす

秋桜揺れる

縁側で

母と語らう

あ  
在りし日のこと

島津文雄

乾きたる

大気巻き込み

逝く秋の

はやすさは指の

ひび割れに沁む

藤森

円



車椅子から

松葉杖へ

丁字杖と

術後の歩行

膝の頑張り

赤羽すえみ

二度三度

霜に合うのが

頃あいと

仕事納めの

野沢菜をつむ

永原隆

日米の

戦火激しき

夏の日々

とも

幼友等と野苺

摘みしは幻

折橋美代子

薄暗い

総文だけど

クリスマス

大きなツリーで

楽しく明るく

安藤寿秀

師走まで

取らずに置いた

野沢菜は

霜に当たつて

今が漬け時

小島ふみ代

ひと晩の

中に真白く

なりにけり

穂高、常念、

白馬三山

松澤美和

栗木氏の

講演聞きて

痛感す

歌は人格

若々しくと

宮腰征彦

ゆく秋に

なかなか落ちぬ

柿の葉の

因を新聞は

温暖化とふ

土田安子



ぽつぽつと

兄弟・連れの

喪のはがき

日脚の速く

暮れのせまり来

三溝みい子

クリスマスと

暮れの売出し

満載の

散らし入りくる

今朝の新聞

藤松淑子

半世紀の

友情刻みし

御歳暮の

太平洋の

釜揚げしらす

下井貞子

芋を干す

天気予報を

気にしつつ

返しくりかえ

秋は暮れたり

古畑かめ代

霜枯れし

野辺の残菊

色残し

ひとしお

一入映ゆる

秋の夕暮

百瀬良夫

日暮れ前

今のうちにと

歩き出す

枯葉蹴りつつ

後二千歩を

田辺幸子

初雪の

穂高連峰

暮れゆきて

鴉の群と

夕星の見ゆ

守屋喜久男

夕暮を

皆既月食

始まりぬ

窓辺に見上ぐ

三日月細く

矢崎修子



歳も暮れ

妻に見せたい

夕焼けを

けち

落ち葉蹴散らし

なび

靡く前髪

島津文雄

日の暮れて

宿屋付近と

ナビ終はり

迷子味はふ

丸亀のまち

折橋玲子

夕暮れの

稜線なぞる

君の手を

見つめてました

暗くなるまで

藤森

円

春先の

霜の被害に

渋柿の

柿すだれなく

軒の寒々

三溝みい子

はたじまい

畑仕舞

生き返るごと

耕やされ

冬の日差しに

光る黒土

田辺幸子

欲出さず

わがなりわいに

ひと筋で

平凡なるも

悔いることなし

永原隆

寒晴れに

さそわれ出で来し

川辺道

突と飛び立つ

二羽の白鷺

折橋美代子

友よりの

大輪の百合は

南天と

新春祝ひて

玄関に咲く

赤羽すえみ



まず願う

コロナ禍無事に

終息へと

鎮神社へ

初詣する

小島ふみ代

てくてくと

二年詣りに

一時間

寒空夜の

初ピクニツク

安藤寿秀

進中の

角度誤り

ホバリング

患者苦しみ

吾はハラハラ

宮腰征彦

お雑煮の

湯気の向かうに

夢語る

子らの未来像

うつすらと見ゆ

松澤美和

この話

省エネなのかな

石油を使い

石油を使わぬ

道具を作る

土田安子

絵符のみの

時もありしや

門松の

時の流れに

とし

年齢を想ひぬ

古畑かめ代

コロナ禍の

正月迎へむ

注連縄を

自作で作り

収束祈る

百瀬良夫

公民館行事の

注連縄作り

百歳会の

手元をみいる

守屋喜久男



「御柱お休み処」は

広場隅

注連縄はられし

神木御座す

藤松淑子

こゆき

粉雪舞ふ

大門神社の

境内に

しめ縄をなふ

男衆集ふ

折橋玲子

去年までは

夫の手で張る

注連縄の

なき玄関に

今朝日さす

薄田勝美

お正月

しめ縄張って

手繰り寄せ

陽光照す

松竹に梅

島津文雄

公民館の

注連縄作りに

参加する

小学生も

吾も手足つらせ

矢崎修子

注連縄は

てのひらの中に

まとまらず

講師の助言は

耳に入らず

藤森  
円

注連縄も

張れず

元旦の

青空おろがむ

病室の窓

下井貞子

源流に

支流を合わせ

たちまちに

大河となりて

コロナ禍激し

永原隆



ぬし  
主老ひて

家は壊され

黒土が

はるひ

春陽の中に

静もりてゐる

赤羽すえみ

元日に

初山河歩く

吾の慣らひ

今年も老骨

軋ませ乍ら

松澤美和

画像に見る

豪雪地帯は

厳しくも

雪中キャベツは

まろやかなりし

三溝みい子

パツチンと

雪を挟んで

玉作り

暫く振りの

孫と雪投げ

小島ふみ代

客足の

とだえし宿場

奈良井宿

峠下ろしの

吹雪に暮れゆく

折橋美代子

葡萄の木

藁で根元を

巻かれ立つ

積雪の中

藁靴のごと

田辺幸子

積りたる

雪の下から

梅つぼみ

頑張ったねと

声かけながむ

古畑かめ代

雪の朝

通学の兎の

通る道

寒さをおして

急ぎ雪掻く

百瀬良夫



寒さ増す

季節を迎えて

春を待ち

雪はやめてと

願いかなわず

安藤寿秀

雪溶けて

こけしの頭

のぞかせる

春はもうすぐ

福寿草の花

薄田勝美

薄明かり

ぬりぐら

塗蔵の障子

ともらせて

背丈越す雪

庭ふかぶかと

矢崎修子

白川の

氷柱群の

川の辺に

雪を背負った

投光器あり

守屋喜久男

あ

遭ひたれば

ならひ

つい追ふ慣の

野良猫の

安否気になる

一面の雪

藤松淑子

西空の

ぐんと膨らむ

雪雲に

のみこまれゆく

満月の白

折橋玲子

雪の降る

露天でひとり

足伸ばし

愚痴も不満も

すっかり流す

島津文雄

児童たちの

両手を赤く

腫れさせて

現れました

大雪だるま

藤森

円



あとがき

令和三年度も、コロナウイルスの感染拡大により振り回された一年でした。短歌講座も中止一回、延期一回となりましたが、受講生の皆様には熱心に、また、楽しく受講していただきました。この歌集は、そんな皆様の一年間のまとめとして作成いたしました。今年度の歌集が第三号となります。

本講座の講師、藤森 円先生には、一首一首について、丁寧にわかりやすくご指導いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。この歌集を、今後に役立てていただければ幸いです。

令和四年三月

塩尻市中央公民館長 赤津 勝広

**令和3年度短歌講座 短歌集**

編集・発行 塩尻市中央公民館

発行日 令和4年6月

お問合せ 中央公民館

電話：0263-52-0899